



Title	盲ろう者の支援活動における未来共創
Author(s)	石塚, 由美子; 山崎, 初江
Citation	未来共創. 2026, 13, p. 83-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106426
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

盲ろう者の支援活動における 未来共創

石塚 由美子

NPO 法人ヘレンケラー自立支援センターすまいる

山崎 初江

NPO 法人ヘレンケラー自立支援センターすまいる

要旨

著者らは大阪市天王寺区に拠点を置く NPO 法人ヘレンケラー自立支援センターすまいるに所属している。すまいるは、盲ろう者に寄り添った福祉サービスを提供することを目的として設立された盲ろう者の支援団体であり、2026 年 1 月現在、17 名の盲ろう者と 10 名の職員、約 30 名のボランティアスタッフが在籍をしている。すまいるは、2024 年および 2025 年に大阪大学吹田キャンパスで行われたネイチャーフーリング自然「感」察会に参加をし、学生や教員、学外からの参加者らと共に自然とふれあう活動を行った。その際、盲ろう者とはじめて交流をしたという学生や、すまいるの活動内容などについて関心をもつ参加者らに出会った。そこで本稿では、盲ろう者の日常生活や、すまいるの創設の経緯および支援活動について報告をする。

※二名の著者は本稿に同等の貢献をしている。info@db-smile.jp

1. はじめに

目と耳の両方に障害をもつ人々のことを盲ろう者といいます。著者らは大阪市天王寺区に拠点を置くNPO法人ヘレンケラー自立支援センターすまいる（以下すまいる）に所属しており、盲ろう者の支援活動を行っています。2026年1月現在、すまいるには17名の盲ろう者と10名の職員、約30名のボランティアスタッフが在籍をしています。

このたび私たちは、2024年および2025年に大阪大学吹田キャンパスで行われたネイチュア・フィーリング自然「感」察会に参加をし、学生や教員、日本自然保護協会の自然観察指導員らと自然に触れ合う活動を行いました（本特集記事参照）。

盲ろう者は、全国に約14,000人いるとされています（大河内 2017）。盲ろう者の障害の種類は、目と耳の障害程度により、おおむね以下の4つのタイプに分けられます。

「全盲ろう」：全く見えない、全く聴こえない。

「全盲難聴」：全く見えないが少し聴こえる。

「弱視ろう」：少し見えていて、全く聴こえない。

「弱視難聴」：少し見えていて、少し聴こえる。

また、障害の種別の他に、次の二つのタイプの分け方があります。

「盲ベースの盲ろう者」：視覚障害が先にあって、後に聴覚障害者になった盲ろう者。盲学校で教育を受け、点字を身に付けている方が多い。

「ろうベースの盲ろう者」：聴覚障害が先にあって、後に視覚障害者になった盲ろう者。ろう学校で教育を受け、手話を身に付けている方が多い。

盲ろう者のコミュニケーション方法は、触手話、弱視手話、指文字、指点字、ブリスタ（点字用タイプライター）、手書き、筆記、音声等、多岐にわた

ります。しかし、盲ろう者が他者とコミュニケーションを取るには、それを媒介する通訳・介助者の支援が必要であるため、盲ろう者の日常や支援活動の様子が広く発信される機会は限られています。じっさい、ネイチュア・フィーリング自然「感」察会においても、盲ろう者とはじめて会ったという学生が多数みられました。また、自然「感」察会での交流を通じ、私たちの活動内容に関心を寄せてくれる参加者がいました。そこで本稿では、特集「人間と環境」の記事の一つとして、盲ろう者の日々の生活や支援活動について報告をします。まず、すまいるの理事長を務めており、全盲難聴である山崎が、盲ろうとなった経緯や他者とのコミュニケーションの方法、ならびにこれから積極的に挑戦したいことなどについて述べます。次に、「すまいる」の施設長を務める石塚より、すまいる創設の経緯や支援活動の詳細について紹介をします。おわりに盲ろう者が、大学と連携し、ネイチュア・フィーリングのような自然を感じる活動に参加をして感じたことなどについて共有します。

2. 盲ろう者として（山崎）

2.1. 盲ろう者になった経緯

私が、難聴になったのは3歳の時の突発性難聴が原因でした。小学校に入る前は保育所に通っていてまだ補聴器を使わずにいましたが、片言の会話でも成り立っていて、いつも誰かと遊んでいました。遊び仲間の男の子の家の周りを数人で走り回り、今の時代なら「こら、この悪ガキが」と怒られるところでしょうが、何もいわれないおおらかな時代でした。自然がいつも身近で、近く野原や川や山は、どこも遊び場のような子供時代でした。

私は小学校1年生を2回経験しました。最初の1年間は京都府立舞鶴聾学校の分校で、盲学校も一緒でした。学校の真ん中に小さい川が流れていて、私の故郷にはいない生き物がいました。それに触りたくて、たったひとりの同級生の京子ちゃんと川に入って捕まえました。それはザリガニでした。ザリガニ釣りに夢中になって授業を忘れてしまい、先生が探しに来てくれたのですが、「危ないから川に入ってはいけない」といわれました。そんなおてんば1年生の聾学校生活は、1年で終わりました。

学校では言葉の授業がありました私はなかなか話すことができず、環境を変えるため地元の学校に入学しなおしました。普通学級ではなく支援学級だったので、学年の違う児童ばかり。同級生は居ませんでした。

目は、小学校5年生の頃には昼間は光がまぶしく感じられ、夜は夜盲。灯りがないところではなかなか目がなれず、歩けませんでした。視力はずっと変わらないのに目が疲れやすいのと、よく物にぶつかるので病院を受診して、網膜色素変性症であることがわかりました。高校3年生の時でした。小学校の頃から症状は出ていたようですが、この病気でいずれ目が見えなくなるなんて、その当時は想像もしていませんでした。

中学も支援学級に入りました。難聴だからと差別されることもなく、とても楽しい中学時代を過ごしていました。そんな中学時代も見えづらいことが多かったのでしょうか、思い出されることがとても少ないです。そんな少ない記憶ですが、父親が写真をよく撮ってくれて、アルバムを見るのがとても好きでした。写真の記憶は頭の中のアルバムに残っています。

目の病気の進行はとても緩やかで、自分に病気があるのを忘れるほどでした。細かい文字が読めていましたし、新聞や本を読むのもかなり好きでしたが、視力よりも視野がどんどん狭くなっていき、色も段々と分からなくなってきました。空が白っぽく見えるようになった時、「もうそんな所まで来たのか」と驚きました。その後は、長い間霧の中にいるような白い世界が続きました。明暗は分かりますが夜は暗いまま。最近は昼間でも暗い時があります。そんな風に私の障害は進んでいます。

2.2. 新たな感覚

視覚を失って得られた感覚があります。私は難聴で聴力が少し残っているので、文字を音声で読み上げてくれるソフトを利用しますが、それだけでは疲れてしまうので、点字を身に付けました。まだ早く読める方ではないものの、左の人差し指で読んでいます。その為なのかどうなのか分かりませんが、時々左利きになったりしています。以前は完全に右利きで、洋服のボタンは右手で留めていたのに、左手を使うようになりました。すでにある感覚で、するどくなったのは嗅覚でしょうか。特に、雨の降り始めはすぐに分かります。「雨

が降りそうだ」と通訳者にいって、驚かれたことがありました。

もう20年も前のことですが、中国地方に住んでいた時に、盲ろう者のグループでパイプオルガンの振動を楽しむ経験をしました。ゴム風船を1人1個持ち、振動を感じるのですが、私はあまり分かりませんでした。まだ音が聞こえるからでしょうか。同じように難聴の盲ろう者も「振動が分からなくて、つまらなかった」といっていたのですが、全盲ろうのある女性は、「振動が分かって、とても楽しかった」と喜んでいました。盲ろう者の感じ方は人それぞれで、違いがあるのが面白いと思いました。

すまいるでは以前、和太鼓の練習をしていました。盲ろう者にはそれぞれ通訳者が付き、背中を叩いてリズムを伝えます。演者は振動を感じ、それを見ている盲ろう者にも振動で伝わるそうです。私にはその感覚はあまりなく、音で聞いてしまいます。

今は和太鼓メンバーの減少と、練習場所の確保ができない等の問題で、長らく練習が出来ていません。もしもみなさんがすまいるの和太鼓に関心を持ってくださいましたら、すまいるDBチャンネルというYouTubeなどで検索出来ますので、見ていただけましたらうれしいです。

2.3. 盲ろうでも挑戦したいこと

私は色々なことに興味を持つのですが、いつも中途半端に終わってしまいます。例えばすまいるの活動で、午後に「游タイム」という時間があります。その中で「挑戦したい」と取り組んでみたのは「太極拳」「英会話」「中国語会話」「花結び」など。残念ながらどれもこれも最後まで出来ず、中途半端に終わってしまいました。

花結びは手芸の一種なので、また取り組みたいと思っていますし、手芸は見えていた頃は、小物を作ったり、人形を作るのが、好きでした。身体を使うことはかなり、難しいですが、「けん玉」や「ジャグリング」、など挑戦したいです。音楽も好きなので、ピアノ、サックスなど、思うだけで、まだ取り組んでいませんが、いつかと、夢を膨らませています。盲ろう者は何も出来ない、自分は何も出来ないと感じた時期がありました。何かを身に付けることはなかなか大変ですし、時間もかかりますが、あきらめないでいたい

と思っています。

数は少ないですが私が出来ることの中に、点字とパソコンがあります。盲ろう者にはどちらも必要ですが、点字は覚えるのに時間がかかり、習得がとても大変です。ですが、パソコンを使うためには点字を身に付ける必要があります。

すまいるは今、盲ろう者のためのソフト「らくらくツール」の開発を進めています。本当に使いやすいソフトで、一度はパソコンに挑戦したけれど操作が難しくて覚えられない、また日本語の理解に難がありあきらめてしまった盲ろう者に、ぜひ使って欲しいソフトです。そして、支援者がそばにいないでも自分1人でメールができる、自分で情報を得て欲しいと願っています。私は誰に頼まれるのでもなく、自分で勝手に「らくらくツールのPR担当」になりました。その位みなさんに「らくらくツール」を知って欲しいですし、このソフトを使うことで盲ろう者の世界が広がって欲しい。盲ろう者が1人の時でも社会に繋がれる、そんな日が来ることを願っています。

3. 盲ろう者に対する支援活動(石塚)

3.1. すまいる創設の背景

私が初めて盲ろう者と出会ったのは1994年。もう30年以上前のことです。その頃私は盲ろう者（視覚と聴覚の両方に障害がある人）を支援する小規模作業所で働いており、次のような現実に直面しました。

- 盲ろう者が安心して暮らせる環境が十分に整っていないこと
- 「支援されるだけ」でなく、働き、仲間とつながり、将来に希望を持てる場が必要であること
- 本人や家族が抱える“将来への不安”や“孤立感”が非常に大きいこと

こうした課題を痛感した私は職場に改善を申し入れましたが聞き入れられず、方向性の違いを感じ退職しました。これが「すまいる」創立の原点です。

3.2. 1999年「盲ろう者の人権を守る会すまいる」スタート

1999年、「盲ろう者の人権を守る会すまいる」を立ち上げ、機関紙『あい・らぶ・すまいる』を創刊しました。当初は大阪市の小規模作業所として盲ろう者が集まり、働き、安心して過ごせる「居場所づくり」を目的に活動を進めました。最初の活動拠点は私の自宅でしたが、「サークル的な活動ではなく、盲ろう者を中心に据えた組織が必要」と考え、天王寺区上本町のマンションへ移転し、定期的な活動を開始しました。2001年3月には、「盲ろう者に寄り添った福祉サービスを自ら提供したい」という思いからNPO法人を取得。「NPO法人視聴覚二重障害者福祉センターすまいる」として支援事業を始めました。通所者や通訳・介助者が増えたことから、2012年7月には現在の小橋町のビルへ移転。さらに2017年3月には、全国初の盲ろう者向けグループホーム「ミッキーハウス」を開所しました。2018年には施設の名称を「NPO法人 ヘレンケラー自立支援センター」に変更し、現在に至ります。

3.3. 「NPO法人ヘレンケラー自立支援センターすまいる」の活動

「NPO法人ヘレンケラー自立支援センターすまいる」とは、盲ろう者にとっての「日中活動の場」であり、「日常の憩いの場」です。週5回の活動のうち、月・火・木・金は通所での活動、土曜日は在宅ワークをしています。利用者は通訳・介助者の手引きで通所し、活動中は視覚・聴覚の情報を通訳介助者から得ながら、盲ろう者主体で様々な活動しています。

例えば、午前は就労タイムとし、企業から受託した軽作業を自分のペースで行ってもらい、作業の対価として工賃を支給しています。昼食は、給食スタッフの手作り料理を提供し、盲ろう者自身も当番制で、野菜の皮むきや後片づけなどを担っています。午後は、遊（ゆう）タイムといって、①情報提供&交流（社会問題のニュース、芸能、行きたい場所の情報など、通訳介助者から通訳を受け、情報を入手します）、②健康体操（ヨガ・空手・タップダンスなどを取り入れ、週1回実施）、③散策（周辺をウォーキングし、風や足の感覚などを楽しみます）などを実施しています。このほか、生涯学習、日常生活用具・コミュニケーション機器の展示、通訳介助技術養成講習会の開催、相談支援事業、同行援護、居宅介護サービスなども行っています（図1）。



図1 すまいる納涼会で講師をお招きし「盆踊り体験」



図2 らくらくツールの講習会

しかし活動が続ける中で、利用者や家族からは次のような声が寄せられました。

- ・「自分たちがいなくなった後、この子はどうなるのか」
- ・「今のままでは一人で生活できないのでは」
- ・「仲間がいる場所で暮らしたい」
- ・「日中は楽しく過ごせても、家ではコミュニケーションが困難で孤独を感じる」

私（石塚）自身、聴覚障害があり、聞こえる家族の中で孤独を感じてきた経験があります。だからこそ、利用者の苦しみは他人事ではありませんでした。「活動の場だけでは不十分。安心して暮らせる“住まい”が必要だ」。そう強く感じるようになりました。こうして盲ろう者のための「ケア付き住居（グループホーム）」の実現を目指し、準備を開始し、動き始めて13年後の2017年3月、すまいるの活動拠点から徒歩3分の場所に新築ビルとして、日本で初めて盲ろう者に特化したケア付き住居「すまいるレジデンス for the DeafBlind（ミッキーハウス）」が誕生しました。ここでは、安全や視認性などに配慮しながら、入居者の自立性やコミュニケーションに重点をおいた運営を行っています。具体的には、①階ごとの色分け（2階＝オレンジ、3階＝緑、4階＝青）で視認しやすい、②浴室・居室の高コントラスト配色、③点字・シンボルマーク・手すりの配置による安全な動線、④24時間、盲ろう者の特性を理解したスタッフが支援、⑤「できることは自分で。必要なときだけ支援」を徹底、⑥入居者の声を反映した定期ミーティング、などです。

私は「盲ろう者のことは盲ろう者に聞く」ことを基本にしています。見える人・聞こえる人の“善意”が当事者の要望にそぐわない場合もあるからです。支援者が決めるのではなく、当事者の声を尊重し、ともに生活の場をつくっていくこと。この姿勢を貫き、支援者と当事者が力を合わせ、「ミッキーハウス」を実現することができました。

3.4. 見えにくくても、聞こえにくくても、自分で情報を得られる「らくらくツール」

2024年から、ニュース・天気・メールを簡単に確認できるパソコンソフト「らくらくツール」を開発しています（図2）。主な機能は、①ニュース閲覧、②天気予報、③メール送受信、④難しい日本語を「やさしい日本語」に自動変換、⑤AIに文章で質問すると回答が返ってくる、⑥音声読み上げ（声の種類の選択可）などであり、検索が苦手でも、質問するだけで必要な情報にアクセス可能なことが特徴です。

開発をはじめた理由は、「一人でも情報を受け取れる仕組みをつくりたい」という気持ちからです。盲ろう者は触れて情報を得ますが、コロナ禍では“距離を取る”必要があり、一人では情報にアクセスできない状況が生まれました。また、東日本大震災の時に家で一人取り残され、何の情報も得られずにいる盲ろう者がいることを知り、大きな衝撃を受けました。このことから、まず最初に情報へのアクセスが限られている方々のために役立つソフトウェアを開発しようという思いが生まれ、開発が始まりました。パソコンが苦手な方でも使えるよう、盲ろう当事者の声を取り入れながら改良を続けています。

情報が得られないことは、生活の不便だけでなく、命や安全にも関わる重大な課題です。「らくらくツール」を通して、たとえ一人で家にも、自分の力で情報を得て、人とつながれる環境を届けたい。盲ろう者の方々が社会でより広く活躍できるよう、すまいるはこれからも取り組みを進めていきます。そして最後に。すまいるは盲ろう者のみなさんが冗談を言い合い一緒に笑い合える、温かく明るい憩いの場でありたい。船に乗って、大海原で冒険をした後はいつでも戻れる、碇を下ろしてゆっくり休める、みんながホッとするような港でありたいと思っています。

4. 吹田キャンパスでのネイチャ・フィーリングに参加して

このたびすまいるは、大阪大学で開催されたネイチャ・フィーリング自然「感」察会に参加しました（本特集記事参照）。この「感」察会では、植物のにおいを嗅いだり（図3）、どんぐりの重さをあてるゲームをしたりして、大阪



図3 大阪大学吹田キャンパスでのネイチャ・
フィーリングで嗅覚をフル回転

大学の学生をはじめとする他の参加者らと自然にふれあう活動を行いました。ここでは、障害の有無にかかわらず、自然について共に学ぶという体験ができました。学生の皆さんには、盲ろう者に関心を持っていただいたこと本当にありがとうございます。皆さんの絶え間ない頑張りが、明るい未来を切り開いて行かれることと信じています。どこかで盲ろう者を見かけたり、出会った時は、気軽に声を掛けてみてください。その小さな勇気が優しい社会を築くことに繋がるでしょう。最後に、「盲ろう者とコミュニケーションしてみたい!」と思われた方は、いつでもすまいるに遊びに来てください。

参考文献

大河内直之

- 2017 「盲ろう者、特に視覚障害者におけるコミュニケーション支援の多様性に関する研究」『厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）分担研究報告書』
https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/2015/153091/201516038A_upload/201516038A0005.pdf

Web サイト

NPO 法人ヘレンケラー自立支援センターすまいる

- 2026 「すまいるDBチャンネル」<https://www.youtube.com/@db3433>（2026/2/6アクセス）